

# 時事新報

明治十九年二月四日 木曜日

と補足金と下付せんとは其額額<sup>そく</sup>年々幾百萬圓に上りて止まるべしや我輩が今日に豫定するふと能はざる所なり日本郵船會社の決心は誠に嘉みそべし然れども其決心にして果して費用は大なるものと相伴はん限りハ何卒我政府も亦其監督を怠らざることを希望とする

○銀行會社列記  
雜報

東京明治生命保險會社  
熊本第九  
岐阜第十六  
福岡第十七  
年 創一、五  
鹿兒島第百五十二  
野蒜米商會所  
遠州川井保全社  
同金指銀行  
一、三、二五  
一、九九

○五七五  
長崎第十  
越後津川第三十七  
和歌山第四十三  
石見津久野第五十三  
佐同大島銀行  
駿賀三省銀行  
阜本銀行  
田銀行

美濃大垣銀行  
飛驒古川銀行  
伊豫宇和島銀行  
福岡吉井銀行

佐賀第一白六  
福島第一百七  
名古屋第一百三  
一、三、  
一一〇六二  
上三河實飯銀行  
上滋川銀行  
上東金銀行

尾張半田第三百卅六無配當信添荷山銀行  
○倫敦特別通信

在英國 正論 生  
英國々會議員總選舉に就き 三週間來英國三千四百萬の人民を狂氣せしめる下議院の選舉も漸く前進して習

は落ちてしまつたり今回の選舉に於て英國社會中等以上の多數は保守黨の勝利を希望したると明白なる事實なり

初め市區選舉にては保守黨充分の勝勢にてタイムス初の其他の諸新聞も斷然保守黨の勝利なりと公言し自由

本邦の機関あるアーリニエースの如きも自由黨は是迄市區に多數と占めたれども今回之例に反し地方より多數と口むべしなぞ止むを覺えた出でたる言ふと書か立てて

より諸新聞之デーリックースの卑怯ある貪惜との強  
き市區にてさへ多數と得ざる自由黨が如何にして地

力に多數を得べしやと頻々嘲弄するに至りたり然るに  
向予はらん地方選舉の初まるや否追々自由黨多數と占  
る。

トヨウの如き結果と生じたるは莫外至極の有様にて  
ソーリー・ニュース記者も自ら其先見の明あるよ<sup>ロココ</sup>うかし  
るなるべし

自保  
イギリス  
英蘭  
ウニペス  
二七  
三八  
蘇格蘭  
スコットランド  
六九  
一〇  
愛蘭  
アイル蘭  
一一  
大學  
ダカ  
一二  
合計  
ヒュン

合計 四五八 三〇 七〇 一〇二 八六  
外之不覺 一〇二 一〇二 八六  
大六六 八六

外に元老よりの二人あり總計六百七十人なり此二人の一人は保守一人は自由黨あるべしと云ふ  
何故に地方人民が自由黨を助けるやと對て丈生覺ら

々にして或ひナヤンバレン氏ダ自由黨の政府とある心土挿條例を改正し力役者をして一人毎に一町二反

地西と牝牛一頭を得せしむべしと云ひたる故なりと  
ひ又此度新に撰舉權を得たる力役者は之を自由黨の

なりりとして自己同黨を尊崇すると右等の力役者か常疾視する屋主の多く保守黨あるが故に之より反して自黨を助けたりと云ひ或は自由黨のへては承認されて居る

とあらん保護税を課すべし保護税を課せば食料購買  
べし廉價の麺包を喰はんとするものは我黨と助けよ  
れ

云ひたる故なりと云へり就中廉價食料のと最も有力の原因なるべしと思はる兎に角に自道黨の勝利は無

父の力役者の助に據りるは變あきとみて其頭數

明治十九年二月四日 木曜日 舊内成正月朔日 (乙未) (西暦一千八百八十六年)

これが香港上海銀行に手中より委ね同銀行は周旋により此の百五十萬圓は果して何の爲めにするものなるや未だ其詳細を探知するよ遠あらずといへど此時の事情と簡単に形容をきくば城内不意に一駆の敵兵の近づくと見て首と上にて遠く郊外を見渡そふ雲際無數の旗幟天と蔽ふものあるを認めたると等しく其旗幟の何たるを聞くに及ばずさて先づ竊りに一覗と喫せざると得ざるの情智あり而して又顧みて測定致遠等の舉動を見るに船客は運賃なり荷物の運賃ありこれと目下日本郵船會社が收納する運賃額に比すれば平均一割五分乃至五割と廉く其相違も亦實に夥しく各港に支店を置き各都府に荷物船客取扱所と置き周旋實に到らざる所あし此際又風説は傳ふる所に據れば今度招商局が航路擴張運賃引下さに其衝も當りたる日本郵船會社にてハ大ふ同局の所置を奇恥なりとし彼れ既に斯の如く無情なれば我れ又永く有情なるを用ひずと坐して敵より奢めらるゝの策を變じて進んで敵と追ふの謀略に改め先づ長崎より釜山仁川芝罘を經て天津に往來する新航路を開き尙やも敵船我版圖内より退去せざるみ於てハ更に數艘汽船を織ちて支那沿海の諸港に往來せられま此際に敵は本國と衝いて其降りを促すの計を定め先近日既に同會社よりは公然照會と招商局に送りて其決答と促めたりといへり果して此風説として事實あらざめば招商局の奮發といひこれに對する郵船會社の決心とひ義れ劣らぬ兩勇士悪七兵衛と二保谷四郎ダしころ引の昔も思ひ出されて勇ましくも亦天晴となり然れども我輩は此兩勇士の奮發を見物して心痛かに疑懼もあれど此上あき仕合なども彼れも亦一個の知者萬不容易に退縮せず頑然其航路と守りて敢て俄かに其降旗と翻さる事もあらんには郵船會社と赫と志て大に怒り蓋其線路と擴張玄益其汽船を増發左益其運賃を引下ハ唯一戦に敵陣を陥るゝの後にあふされば遂に其心に慄らざる事ならん此時に際し郵船會社の出入と計算せん必ず損多くして得少なく其株金一千一百萬圓に對して年八分の利益を配當するの出來難きは勿論競争は弊害の及ぶ所遂には年一分の利益配當さへ六ヶ敷無利足貸付金に棄てたるものと歸めて其利足を要せどとするも人民の持株八百四十萬圓丈けにハ是非とも八百六十萬圓は政府自身の持株たるが也又に此分丈けは諸種立金等を仕拂ひたる上よりは年々一千一百萬圓の株金ふ對立て八分の利益を與へざるを得ず株金の内二百六十萬圓は政府の爲めに経費にさへ不足と告げく年々歲々常に幾十百萬圓の損失を蒙るに不幸と見るやも知るべからず此時より兼て同會社に對して保護を約束したる日本政府は同會社の爲めに経費の利益と與へざるを得ず斯る事情にて彼れの是との